

秀吉が更級とともにライバル視した「雄島」

シリーズ49で豊臣秀吉が「さらしなの月」を意識して詠んだ和歌「さらしなや雄島の月もよそならんただ伏見江の秋の夕暮れ」を紹介しました。秀吉が月を美しく見せる空間としては自分の砦である伏見城付近の水辺の方が、当地や日本三景の一つ、宮城県・松島より優れていると言っている歌です。裏返せばそれほどさらしなと松島の月がすばらしいと当時の権力者に認識されていたことを裏付ける歌です。雄島はまた、松尾芭蕉が「奥の細道」の旅で船で上陸した可能性があるところです。

その雄島に行つてくる機会がありました。ただ、東日本大震災の津波などでここに紹介した写真の姿は現在、少し変わっていることが心配されます。

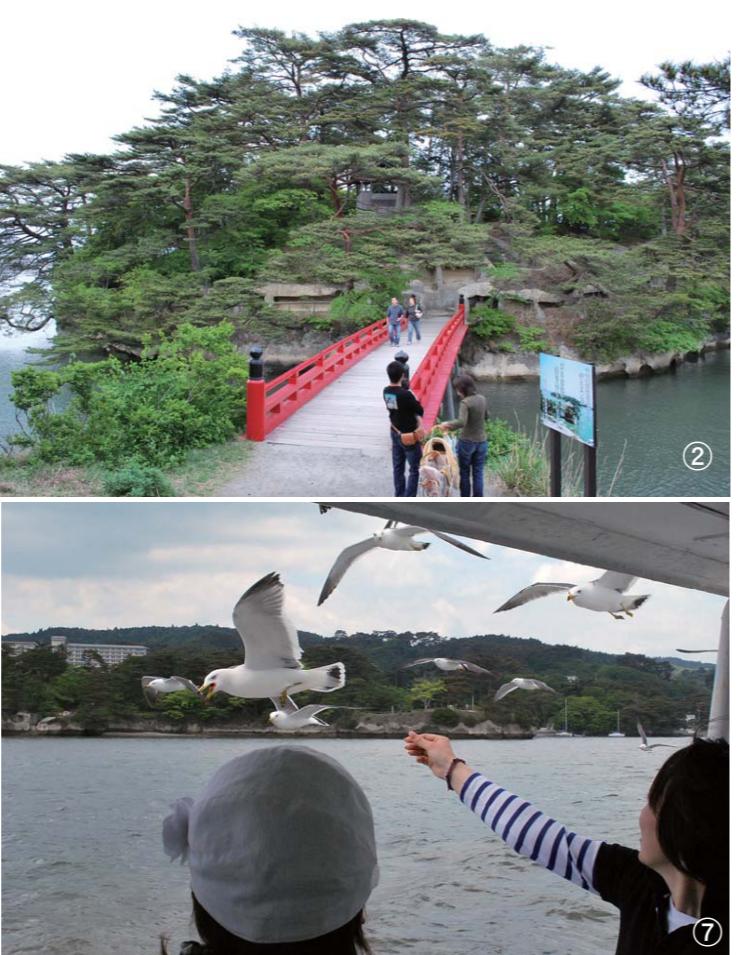
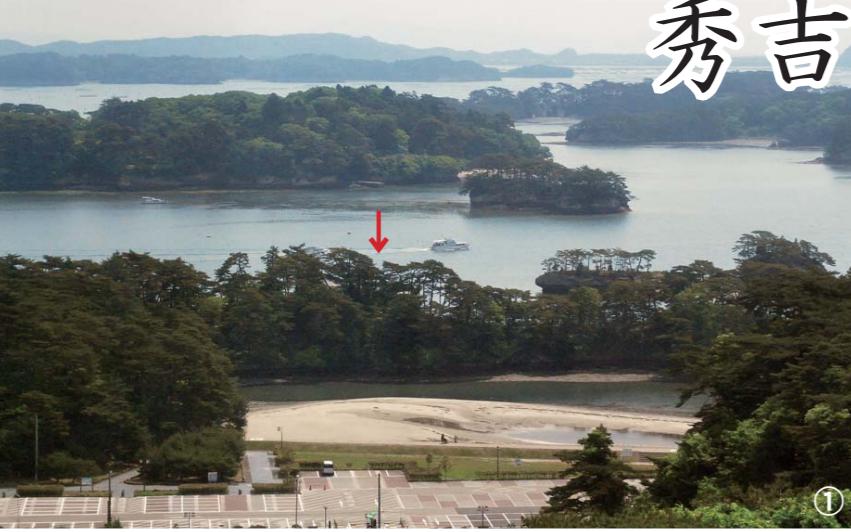
れたことからの由来だそうです。すると、秀吉は和歌の中で「雄島の月」と記してはいますが、現代人が「松島の月」と言うときの月の光景をイメージしていたことがうかがえます。また逆に言うと、秀吉の時代、雄島は松島を代表する島であつたことになります。

①の写真をご覧ください。矢印の先が雄島で、南北約二百メートル、東西の最大幅が約五十メートルの細長い形で、陸に最も近い島の一つです。②の写真が陸側から雄島に渡る橋で、「渡月橋」と呼ばれます。

島に入ると、すぐ右側に岩を彫り刻んでつくった磨崖仏が目に飛び込んできました。③の写真です。来島

▽松島は千松島から
雄島は公島を構成す

更級旅



「奥の細道」で芭蕉も上陸した？


なつていいくと想われま

しまいましたが、宮城県文化財保護課などが一〇〇六年から周囲の海底を調査。「靈場としての雄島」が日本三景としての松島を生み出す原点になつたことがさらに浮き彫りに

秀吉・芭蕉の時代の前から雄島は、巡礼者でぎわう特別な靈場だつたそうです。石の板に文字を刻み死者を供養する板碑が多数、岩を彫り削つた岩窟に安置されていました。⑤の写真は今も残る岩窟です。明治から昭和にかけての雄島の公園整備の際、板碑の多くが海に投棄されて



帰りは遊覧船で、芭蕉が松島への船路のスタート地点にした塩釜市へ向かいました。餌を手にする乗船客に海鳥が近づき（写真⑦）、奇岩がいくつも見えました。（⑧）の写真は「鐘島」と呼ばれる島。島の穴に波が打ち寄せると、寺の鐘の音のように聞こえることからの命名です。これらの風景は今どうなっているか。海水面に月光が映る「松島の月」は体験できませんでしたが、趣が深いだろうこととは容易に想像できました。

発行 二〇一一年五月十五日
編集 さらしな堂
(代表・大谷善邦) 
〒三八九一〇八一三
長野県千曲市大字若宮二一八四一六
(旧更級郡更級村)